

主日礼拝4月25日（日）

題 『宣教への再出発』

テキスト：ヨハネによる福音書21章：1～14節

今日はよみがえられたイエスさまが3度目に弟子たちに現れた場面です。

◆イエス、七人の弟子に現れる

1:その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。

場所はガリラヤ地方のティベリアス湖畔、つまりガリラヤ湖のことです。

聖書によれば、弟子たちは、「ガリラヤで会うことになる。」という主イエスのことばを思い出して故郷に帰っていたのだと思われます。ガリラヤ湖畔は、ペトロや何かの人たちがイエスに招かれた場所で現在そこには古くからの教会が建てられています。

今日の最後の個所の14節を読むと、イエスが姿を現されたのは、これで三度目だと言われています。三という数字は、聖書では、「極みまで」という意味があるようです。つまり、イエスは愛する弟子たちに、ご自身の復活を極みまで、とことん示されたということになります。

ただ復活は科学的事実というよりも、弟子たちにとって、信じる者たちにとっては、体験的な事実であり、真理であり、また将来に向けての希望でもあります。

この時、7人の弟子たちが集まっていたようです。他の弟子たちはどこのいたかは記されていません。

弟子のリーダーであったペトロは言います。

3:シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言いました。イエスに出会う前の、もともとの彼の仕事です。彼はもとに戻ったのです。しかし、単に戻ったのではなく、イエスに出会い、十字架を経験して戻ったのです。新しい歩みです。宣教への再出発の時でもあったのです。

他の弟子たちも「わたしたちも一緒に行こう」と言います。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。7人の侍ではありませんが。7は完全数です。新しい歩みがガリラヤから始まったのです。わたしたちの人生の上にも起こる事だと思うのです。しかし、再出発をしたにもかかわらず、

「しかし、その夜は何もとれなかった。」この世の現実は厳しかったのです。これはこの時の弟子たちの状況だけではなく、初代教会の状況、社会や世界が非常事態になった時の、この世の教会にもあてはまるように思えます。

思ったよう、願ったようにいかないこともあることをわたしたちも経験から

知っています。しかし、その厳しい現実を神はイエスさまは見ておられるのです。

4:既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。

意味深い光景であり、言葉だと思うのです。「認識は後からやって来る」と聞いたことがあります。この時は弟子たちはイエスさまと分からなかったのですが、後では「そうなのか。」とはっきりと分かったのです。

「イエスが岸に立っておられた。」私事ですが、このことばは大好きなことばです。イエスは暗闇の中で、弟子たちを見ておられたのです。うれしく思います。岸に立たれるイエス。陸と海の境め。陸は安全な場所、海は危険な場所と理解するなら、イエスは、安全な場所と危険な場所の両方にまたがる岸に立たれる。私たちが平安で喜ぶ時も、苦しみで涙を流す時も、じっと見守ってくださっているのです。

イエスさまは弟子たちに声をかけられました。

「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼

らは、「ありません」と答えたのです。 その日、魚は獲れなかったのです。

このことは教会の働きも一生懸命奉仕をしても、見える実りがない時もあるということです。しかし、決して無駄なことは一つもないことを知っています。その時こそ、心静め、希望しつつ、忍耐して主イエスの声を待つ時だと思います。神さまはほっておかれる方ではありません。見つめてくださっているのです。

6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。

イエスは弟子たちに語りかけられたのです。そしてその通りにすると収穫があったのです。思ってもみなかった不思議なことが起こりました。

その時、弟子たちはイエスの存在に気づきます。聖書のことばを聞き歩み出す中で主イエスが共にいてくださることを分かって来ることがあるのです。弟子たちは、驚き、心躍らせ、大急ぎでイエスのいる岸へと戻ります。

7:イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。

シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとい湖に飛び込んだ。ちなみにこの個所は、「上着の裾をからげて」と訳すこともできるようです。

8:ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸か

ら二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。

岸から弟子たちがいた場所はおよそ100mほどの比較的近い場所でした。9:さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。心がほっとする個所です。イエスさまは疲れていたであろう弟子たちのために、自ら心を込めて「あさげ（朝食）」の用意をしてくださっていたのです。炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。

10:イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。

11:シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。

百五十三匹とは、当時、地中海地域にいた魚の種類といわれます。

それほどいたけれども網は破れなかった。この網を、後の教会と理解した人たちもいたようです。主イエスという神さまの網は、いくら人が増えても破れないということです。しかし人間の思いや考えを中心置いた群れは人が増えて大きくなって行くと内側が破れる危険があるのです。世界の教会の歴史を見れば分かる事です。12:イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。

イエスさまが、朝食を与えてくださった。弟子たちは、もうその方がイエスさまであることを知っていたのです。もう尋ねたり、疑ったりする必要はなかったのです。ガリラヤ湖畔での食事。ガリラヤ湖近くの丘で、またこの湖畔のほとりでイエスさまと共に食べたパンと魚の朝食は、これから先、弟子たちの心の中に温かく残り続けたとことだと思えます。その思い出は伝え続けられ、聖書のことばとして残り、教会で聖餐式を行う度に思い出されることでもあるのです。

私たちも、イエスさまと神さまと共に生きた人たちとの懐かしい思い出、交わりを覚えながら、今共にいる人たちとの交わりを大切にしながら生きて行きたいと願います。

◆イエス、七人の弟子に現れる

- 1:その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちに御自身を現された。その次第はこうである。
- 2:シモン・ペトロ、ディディモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、それに、ほかの二人の弟子が一緒にいた。
- 3:シモン・ペトロが、「わたしは漁に行く」と言うと、彼らは、「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。
- 4:既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。
- 5:イエスが、「子たちよ、何か食べる物があるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。
- 6:イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった。
- 7:イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。シモン・ペトロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとい湖に飛び込んだ。
- 8:ほかの弟子たちは魚のかかった網を引いて、舟で戻って来た。陸から二百ペキスばかりしか離れていなかったのである。
- 9:さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚のせてあり、パンもあった。
- 10:イエスが、「今とった魚を何匹か持って来なさい」と言われた。
- 11:シモン・ペトロが舟に乗り込んで網を陸に引き上げると、百五十三匹もの大きな魚でいっぱいであった。それほど多くとれたのに、網は破れていなかった。
- 12:イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。弟子たちはだれも、「あなたはどなたですか」と問いただそうとはしなかった。主であることを知っていたからである。
- 13:イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。
- 14:イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である。